第63回
弁護団で活躍する若手に聞く～ NOON 弁護団 編～

聞き手：新進会員活動委員会委員　武田 浩一（66期）

新進会員活動委員会では，各分野で活躍している若手弁護士のインタビュー記事を掲載しています。今回は，平成24年4月，大阪の老舗クラブNOONを経営していた金光正年さんが，都道府県公安委員会の許可を得ず，客にダンスと飲食をさせたことが現行（平成28年4月現在）の風営法に規定されている「設備を設けて客にダンスをさせ，かつ，客に飲食をさせる営業」（法2条1項3号）に当たるとして逮捕・起訴された事件につき，1審で無罪判決，検察の控訴に対し控訴棄却の判決を勝ち取ったNOON弁護団で活躍した水谷恭史弁護士（61期，大阪弁護士会）にお話を伺いました。

―― まず，NOON弁護団（以下「弁護団」という）に入った時期，経緯を教えて下さい。

私は，弁護団が発足してから約1か月後に，知り合いの弁護士から声をかけてもらい，加入しました。元々信頼関係があった弁護士に声をかけてもらったことに加え，事案の内容を聞き，金光さんの逮捕・起訴は明らかに間違っており，この事件に関わることには重大な意義があると思いましたので，弁護団に加入することに迷いはありませんでした。

―― 弁護団の期の構成，人数を教えて下さい。

弁護団には，1審の裁判が始まった時には二十数名ほどの弁護士が加入していました。期の構成は，50期代が数名，他は全て60期代の弁護士なので，60期代の割合が多く，若い期で構成された弁護団といえます。本件は大阪で裁判が行われていましたので，大阪の弁護士が中心となって活動していますが，東京や沖縄，京都の弁護士も参加しています。このように全国の弁護士が弁護団に加入したのは，弁護団の方々の人脈があったからだと思います。

弁護団に加入した弁護士は元々クラブや音楽に関心があって加入した人が多いですが，クラブや音楽にはそこまで関心がないものの，刑事弁護を熱心にやっていて，刑事弁護人として本件に関わることに意義を感じて参加した弁護士もおり，私もその一人でした。私自身は，大学時代にクラブに数回行ったことがあるぐらいでした。

―― 弁護団の特徴を教えて下さい。

弁護団の期の構成が若く，お互いに遠慮せず腹を割って意見交換ができたことが特徴の一つだと思います。また，若手ということもあってほとんどの弁護士はITに親しみがあるので，連絡を取り合う際にはドロップボックス，メーリングリスト等を活用し，FAXはほとんど使いませんでした。

また，この弁護団にはNOONトライアルサポートという支援団体があることも特徴です。NOONトライアルサポートは，DJ，VJ（ビデオジョッキー），他のクラブの従業員，NOONの常連のお客さんが中心となって結成された支援団体です。金光さんを支援するためのクラブイベントを開催してカンパを集めてくれたり，ホームページを立ち上げてくれたりしました。

―― 裁判の中で印象に残ったことを教えて下さい。

警察の摘発を受けた日はイギリスのロックイベントを開催しており，摘発の瞬間にはSuedeというイギリスの超人気ロックバンドの「Trash」という曲がかかっていました。裁判では摘発当時お店にいた5人のお客さんが証人となったのですが，そのうち3人が摘発の瞬間に「Trash」がかかっていたことを覚えていると証言しました。彼らは，警察が主張するようないかがわしい目的を持ってクラブに来ていたのではなく，純粋に音楽を楽しみに来ていたので，摘発の際に警察がメガホンを使って大声を挙げて流れていた曲が遮られてしまったことを強烈に覚えていたのです。

―― 水谷さんが弁護団で行った活動の内容を教えて下さい。

私は，弁護団の主任弁護人として活動し，各種書面の取りまとめや全体の立証方針を確定したり，警察官に対する反対尋問を行ったりしました。特に印象深かったのは，最初の予定主張書面を提出したときです。書面を提出するまでに



大阪弁護士会
水谷 恭史弁護士（61 期）

3か月ほどの時間をかけ，皆で議論し尽くしてやっと作成した書面だったので印象に残っています。

―― 1審判決の当日の様子を教えて下さい。

判決の言渡しの際，刑罰を宣告する前触れである「被告人を」ではなく，「無罪」を宣告する前触れである「被告人は」という文言を聞いたときは，嬉しいという気持ちよりもほっとした気持ちが強かったです。判決まであと1か月弱というタイミングで，NOONトライアルサポート主催のNOONが摘発されてから2周年記念イベントを行ったのですが，イベント会場でのお客さんは，金光さんが無罪になって当然という雰囲気になっていました。私は，刑事裁判がそんなに甘いものではないと内心思っていながらも，「弁護士として金光さんを無罪にする義務がある」とお客さんに話していたので，自分が話したことを無事に実現できてほっとしました。

判決の後，NOONで無罪記念のパーティーを行いました。摘発を受けた後はお店に設置してあったミラーボールを取り外していたのですが，パーティーの最中に金光さんが脚立を持ってきて，外していたミラーボールを付けたときには，お客さんから盛大な拍手が起こりました。

―― 判決を聞いた後の金光さんの様子はどのようなものでしたか。

金光さんは，嬉しそうな顔はしていましたが，必要以上にはしゃいだりせず，自分を律していたように思います。金光さんは，自分一人が無罪になっても意味はなく，クラブでダンスをすることを規制するような風営法を改正する必要がある，という強い信念を持っていたので，そのような様子だったのだと思います。ただ，本人も内心では不安に思っていたようで，散髪のときに円形脱毛症になっていたのを発見したと言っていました。

―― 風営法の規制内容についてはどのように思われますか。

我々は，裁判を通じて，クラブは，音楽，ダンス，ファッション，アートなどの多様な芸術的表現が発信される「表現のゆりかご」としての意味を担っていることから文化であるといえ，そうした場所で皆が音楽を楽しむことを規制することが果たして成熟した文化秩序といえるのか，と主張してきました。西洋では，当初，クラブで音楽を楽しむことは大衆文化に過ぎませんでしたが，歴史を積み重ねることにより，現在ではファーストクラスの文化になっています。日本でも歴史を積み重ねることにより，クラブで音楽を楽しむことを文化として昇華させる必要があり，今はその文化を形成する過程であると思います。

現行の風営法（なお，同法は平成27年6月24日に改正され，改正風営法が本年6月23日までに施行予定）の前身である風俗営業取締法が制定された昭和23年当時の「西洋ダンスはいかがわしいもので一律に規制すべき」との考え方に基づいており，このような考え方は時代遅れの規制だと思います。

―― 若手が弁護団に入るメリットはどのような点にあると思いますか。

弁護団にいる弁護士と接することにより，先輩弁護士などの経験と知識に裏打ちされた物の見方，仕事の仕方，考え方等を知ることができ，弁護士としての技術を磨き続けることができる機会を与えられることが大きなメリットだと思います。弁護士会などで開かれる研修でも知識を得ることはできますが，実際の事件で勉強したほうが圧倒的に自分の血肉になりやすいと思います。また，弁護団事件は，大きな社会的意義を有する事件が多いので，個人個人の関わりだけでなく，法改正等を通じて社会全体のシステムを変えるような問題に関わることができることも大きなメリットの一つだと思います。

―― 若手弁護士へメッセージをお願いします。

若手弁護士には，どんどん積極的に弁護団に入って欲しいと思います。そもそも弁護士は忙しい上，弁護団事件は経済的にペイできる事件ばかりではないので，気後れしてしまうかもしれませんが，とても意義のある活動をしている実感を得ることができ，また，弁護士として成長することができると思います。